広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	初期ニーチェの学問批判（１）：科学的芸術概念をめぐって
Auther(s)	木本，伸
Citation	広島ドイツ文学，8：29 - 44
Issue Date	1994-03
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038093
Right	Copyright (c) by Author
Relation	

広島ドイツ文学

第８号抜刷（1994）

木本 伸 Shin KIMOTO

初期ニーチェの学問批判（１）
―科学的芸術概念をめぐって―

木本　伸

０．本論の目的について

『生に対する歴史の利害』(Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben)(1874)は、ニーチェがバーゼル大学の古典文献学教授であった時期に発表された作品である。この作品の中でニーチェは、広く歴史的学問のあり方について論述している。ことに彼が問題にしたのは、当時その支配を決定的にしようとしていた歴史的学問に実証科学を適用しようとする傾向、いわゆる歴史主義であった。ところで、ニーチェにとって歴史主義に対する批判とは、近代の一現象に対する批判に止まるものではない。彼は「知ること」(Wissen）に最大の価値をおいたソクラテスに、ギリシア文化とそれ以降の世界史が堕落へと転じていった歴史的転換点を見出す者であった[1)]。そのような彼にとって歴史的学問の科学化（知識化）とは、ソクラテスから始まった世界の堕落の極まった姿に他ならない。彼は同時代の多くの否定的状況の根に、歴史主義を見ていくのである。ゆえに歴史主義批判とは、ニーチェの文化批判の核心に位置するものであったということが出来るだろう。

ところが実際にこの論考を通読すると、何か不明瞭なものに突き当たるような印象を受けてしまう。ニーチェは実証科学を容赦なく批判していく。読者はその批判を「なるほどその通り」と頷きながら頁を繰っていく。しかし最後の一頁にいたるまで、批判されるべき実証科学に代わるいわば彼の代案が、はっきりとした形で打ち出されてはこないのである。これでは批判者自身の立場が不明瞭であり、ニーチェの視点に導かれてきた読者は突然、自分の位置を見失ってしまう。同じことは『われわれの教育施設の将来について』(1872)にも当てはまる。バーゼルで行なわれたこの連続講演では、直接には実証科学の問題は扱われていない。しかし、ここでギムナジウムの理念の喪失と教養の形骸化について論じるニーチェの眼差しの背後には、『歴史の利害』と同じ問題意識が秘められている。つまり「教養の形骸化」とは、危機的な文化状況の現象面を意味している。これは伝統の断片化、知識化の別の表現であり、その原因を問われるならば、ニーチェは迷うことなく実証科学を指摘しただろう。講演は回をおうごとに批判のトーンをあげていく。ショーペンハウアーを思わせる老哲学者と伴の若い男、２人の大学生の４人が繰り広げる夕闇迫る山

上での対話。高踏的な議論にとってこの上ない舞台設定である。対話はまずギムナジウムの創設の理念に思いを馳せ、そこから現在の教育状況を断罪し、天才の指導による優れた少人数のためのあるべきギムナジウムの姿について語られていく。しかし、このような議論がどのような結論に至り得るというのだろうか。「教育施設の将来」について建設的な議論を聴きたいと思っていた聴衆は、肩透かしを食らったような思いを抱くのである。この講演に欠かさず足を運んでいたブルクハルトは、友人に宛てて次のように書いている。

「これほどまでに大胆かつ壮大に投げかけた問いと訴えについて、聴衆に若干の答えを期待させているのですから、彼には最後の講演を行なう義務があります。ところが彼は１０日の予定でヴァートラントへ保養に出掛けてしまいました。・・・いったいこのような問題について、人文主義の学徒がどのように納得のいく解決を得ればよいのか、まだ私にはわかりません。」[2)]

では、この結論の不在という事実は何を意味しているのだろうか。ニーチェは何ら自己の立場を持つことなく、批判のみを展開していたのだろうか。そうではあるまい。むしろ鋭い批判が可能だったのは、何らかのよるべき立場を得ていたからなのだ。それは古代ギリシアという理想であった。彼は『歴史の利害』の序文で次のように語っている。

「私は過去の諸時代の、とりわけ古代ギリシアの使徒である限りにおいてのみ、現代の子である自分を超えて、このような反時代的な経験に至ることができたのだ。」(247)

ならば、具体的な提案の成立を見ることはなかったとしても、「古代ギリシアの使徒」として、少なくとも彼の脳裏では問題解決の方向ははっきりしていたと考えるのが自然である。それが誰にも見て取れる形で結実しなかったことには、いくつかの理由が考えられる。まず目に留まるのは、健康および時間的な制約という外的な理由である[3)]。また、彼の取り組んでいた課題自体が、解決のための計画的な立案行動などを許容し得ない構造を有するものであったということも考えねばならないだろう[4)]。本論では、まず１.『歴史の 利害』の成立史を踏まえた上で、２.ニーチェの実証科学批判を俯瞰し、さらに３.彼自身によっては徹底した追求がなされなかった実証科学を克服していくための方法論を明らかにしていきたい。その際に導きの糸となるのが『歴史の利害』７節にわずかに残された次の発言である。

「歴史は芸術作品に作り替えられることに、つまり純粋な芸術形態を取ることに耐えられた場合のみ、もしかしたら本能を維持し、そのうえ目覚ませることさえ出来るかもしれないのである。」(296)

また１８７２年のメモには、「科学的芸術作品への要請、・・・この要請は、いまこの瞬間にも生まれ得るのだ」(F24<2>)という断片が残されている。ニーチェのいう「科学的芸術作品」とは何なのだろうか。この概念を鍵として、彼の科学批判について考えていきたい。

１．『歴史の利害』の成立史

『歴史の利害』はその表題どおりならば、生に対する歴史の「利」と「害」が等しく叙述されていなければならない。しかし、実際には歴史の「害」の方ばかりが強調されているきらいがある。反対に「利」については、そもそも歴史自体が否応なしに受けいれざるをえないものであるがゆえに、その「利」についても考えざるをえないといった消極的な姿勢が見られる。このような「利」と「害」の叙述上のバランスを欠いた著者の姿勢が、ブルクハルトを初めとする歴史家たちにこの書に対する批判的な態度を取らせた原因ともなった[5)]。では、なぜこのような著述上の姿勢が取られたのだろうか。それはニーチェがこの書の執筆に取り組んだ本来の動機のうちに見出すことが出来る。彼は序文で次のように述べているのである。

「私は自分をしばしば十分に苦しめてきた、ある種の感覚を叙述しようと試みた。この感覚を公にすることで、私はこれに対して復讐を果たそうとしたのである。」(246)

彼にとって実証科学とは、「復讐を果たすべき」苦しみの元凶であった。ここには研究生活に没頭していた彼の内心が吐露されている。ではこのような彼の経験は、どのような背景から生まれてきたのだろうか。

ニーチェの青春は、まさに古代に関する学問のために費やされていたといってよいだろう。地元ナウムブルクの高校で首席を通していた彼は、１３才のとき、近隣の私立プフォルタ高校から入学を許可される。全寮制のこの学校は厳格な古典語教育で知られており、過去にクロプシュトック、フンボルト、フィヒテ、シュレーゲル兄弟、ノヴァーリスといった、そうそうたる人材を生み出した名門中の名門として知られていた。ちなみに『悲劇の誕生』を批判する「未来の文献学」なるパンフレットを発表し、ニーチェの文献学界からの追放に一役買ったヴィラモーヴィツ・メレンドルフも、彼の４年後輩であった。このヴィラモーヴィツも後にはドイツ古典文献学界の重鎮的存在となり、今日まで残る多くの原典批判の仕事を残している。ところでプフォルタに限らず本来ドイツのギムナジウムには、ギリシア・ラテンの古典にふれることによって人格を陶冶していくという、フリードリヒ・ヴォルフ以来の理念が流れていた[6)]。このことはニーチェ自身が頻繁に強調するところであり、『教育施設の将来について』でも彼は老哲学者に次のように語らせている。

「あの詩人たちを通して流れこんできたギリシアとローマに源を発する古典精神が、偉大なるアウグスト・フリードリヒ・ヴォルフによってギムナジウムの上に導かれたのは、我々の大いなる詩人たちの時代、あの数少ない真に教養あるドイツ人たちの時代であった。」(688)

もちろん、プフォルタもこの伝統を継ぐドイツを代表するギムナジウムであった。ニーチェが大学で古典文献学を専攻したのも、母校に研究者としてまた人間として尊敬に値する文献学者が少なくなかったことが理由の一つであったらしい[7)]。しかし、ゲーテやシラーのような高踏的で牧歌的な古典文学との交渉が可能な時代はすでに過ぎつつあった。文献

学は芸術であることよりも、科学であることに重きを置きつつあったのである[8]。ニーチェ自身、１８６１年１１月末に妹に読むべき本として合理主義者として知られていたアウグスト・ハーゼの『イエスの生涯』と『教会史』を紹介し、母親と伯母の憤激を買うという事件を起こしている[9]。しかし、ハーゼの本などに着目したのは何もニーチェの卓見によるものではなく、当時古典世界の実証的研究に強い関心を持ち始めていたプフォルタの生徒たちの中では、ごく自然な読書傾向であった[10]。

では、なぜ文献学は科学化していったのだろうか。その根本的解明のためには、社会経済状況との関係なども含め包括的な研究が必要なことは言うまでもない。しかし、少なくとも文献学側の積極的な選択としてこれを考えるならば、テキストに対する歴史的批判的方法の必要が求められていたということをあげなければならない。ヘルマン・ディールスによる「ソクラテス以前の哲学者」に関する信頼できるテキストが刊行され始めたのは、漸く１９０３年のことである。それ以前にはツェラーと言う学者の書いた『ギリシア人の哲学』という不完全な書物しか存在しなかった。「・・・ニーチェの生きた十九世紀に原典批判やテキスト分析がにわかに盛んになった理由は、以上の状況からみて明瞭である。不完全で出鱈目なテキストの横行する現状は、いずれにせよ放置しておくわけにはいかなかったのである。その際哲学上の観念が古代のテキストを歪めてきたという意識が、文献学者の側には非常に強かった。」[11] その結果、出来るだけ「先入観」を排した「客観的」な学問的営為がすすめられ、ゲーテ時代のようなギリシアに対する芸術家的な姿勢は洗い流されていった。こうして今度は、科学の専制とでも呼ぶべき状況が生まれてきたのである。次節で見るように、世界観を放棄した科学は自己の対象を無制限に拡大していく。本来、古典文献学が相手にしていたのは古代ギリシアの限られた文物であった。ところが科学化した文献学は次第に自己の領域を拡大し、歴史学との接点を曖昧にしていった。ニーチェの師であったラテン語の大家リチュルも、約１３万に及ぶ大規模な『ラテン碑文集』の仕事を行なった歴史家モムゼンと一時期共同作業を行なっている[12]。

しかしこのような状況に対して、ニーチェは初めから批判的であったのではない。彼はあくまでも優秀な文献学徒であった。テオグニス研究やディオゲネス・ラエルティオスの典拠批判によって、２４才の若さでバーゼル大学に招聘されたことは有名なエピソードである。この時彼は、文献学に対する変革者として評価されたのではない。彼の研究は当時の学界の領袖的存在であった師リチュルの指導に従った、既成の文献学の枠内にとどまるものであった。しかし、絶賛の内にライプチヒ大学の懸賞を射当てることになるディオゲネス論文を執筆している彼は、友人に宛てて次のように書いてもいる。

「この休暇の間に僕は、ラエルティオスの典拠についての論文を仕上げてしまいたいと思っている。・・・ひとつ何が僕を苦しめているのかを告白しよう。それはドイツ語の文体なのだ。・・・僕はもう本当にテオグニス論文のときのような、ごつごつして、かさかさ乾いた論理のコルセットをはめたような文章は書きたくない。」(B208－209)

だがこの結果書き上げられた論文もまた、本来のニーチェを思わせるような機知や逆説的な言い回しからは程遠い、「論理のコルセットをはめたような」典型的な論文調のものであった。当時学問に従うことで、彼の自由な表現への欲求は抑え込まれていたのである。書簡中の言葉とこれらの事実は、この時期の彼の学問に対する従順な態度とともに批判の芽生えをも語っていて興味深い。うわべは禁欲的なまでに従順であったがゆえに、表面下ではいっそうゆっくりと力強く科学への批判が形成されていたのであろう。

もうひとつ付け加えておくべきことは、ドイツの工業化近代化の進展が、ニーチェの問題意識が収斂していく過程の中で大きな役割を果たしたことである[13]。本来ニーチェは社会学的な考察に欠ける著述家である。それは個々の人間を一単位として計量する統計に対する彼の嫌悪から由来しており、その意味で彼は積極的な反社会学的思想家とも言えるだろう[14]。しかしそれだけに彼の文化批判がはからずも、１９世紀の産業社会に対する批判となっていることは示唆的である。『歴史の利害』７節では、世界観をなくした研究者と実証的知識は、それぞれ工場労働者と工場製品に例えられている。ニーチェにとって産業社会とは、それと併存する「教養」「文化」とともに唾棄すべきものとして感じられていた。ところがドイツの工業化はその一つの成果として、普仏戦争（1870－71）の勝利をもたらす。そしてフランスからの莫大な賠償金と、„Gründerzeit"（泡沫会社乱立時代）と呼ばれるにわか景気の到来。有頂天になったドイツの世論は、これをドイツ文化のフランス文化に対する勝利だと騒ぎ立てたのであった。しかし、ニーチェはまさにそこにドイツ文化自身の危機を見出す。そしてその鋭い危機感が彼に一連の「反時代的考察」への筆を執らせる直接の動機となったのである。

「先のフランスとの戦争が残した悪い結果の中でも最もたちが悪いのは、広く広く、いやあまねく行き渡った次の誤り、世論と全ての公に意見を口にしている人たちの誤りである。つまり、ドイツ文化もあの戦争によって勝利したのであり、いまや桁外れな事件と成功にふさわしい花冠で飾られねばならない、という誤りだ。これはこの上もなく破滅につながる誤りだ。・・・そしてこの完全な敗北とは、『ドイツ帝国』のためにドイツ精神が根絶せられるということだ。」（反時代的考察第１編の冒頭より）(159)

このように大きく動いていく時局の中で、文化の敗北 ── 及びその中心にある科学の勝利 ── に蝕まれていく自分を見つめながら、その苦しみをたんに自分一個の問題として処理するのではなく、時代や文化全体に否定的な影響を及ぼす重大な問題として捉え考察したのが、この『歴史の利害』であったといえるだろう。そこでは彼という個人の経験は、それを通して時代全体がのぞかれることになるひとつの素材として扱われている。このような前提を持つ本書が、科学に対する否定的見解から出発せざるをえなかったのは仕方のないことであった。ではそのような科学とは、一体どのような構造を有するものとして捉えられたのであろうか。

2．実証科学と科学的人間像についての考察

ニーチェは『歴史の利害』の序文の冒頭を、ゲーテの次の言葉で飾っている。

「いずれにせよ、ただ教えを与えるのみで何ら行為を増すことも直に活気づけることもない全てのものを、私は憎む。」(245)

ここにはすでに、実証的な知識の認識する主体に及ぼす否定的な作用が端的に表現されている。それは、知識が認識者の生活や行為（ドイツ語でいう„Leben"）と何の関係も持たないという問題である。このような「„Leben"の排除」という事態は、実証科学が自らの基本的な条件である「反復可能な確実さ」を獲得していく過程で、切り捨てざるをえないものであった。科学は曖昧さを嫌う。そして相手が芸術であれ政治的な事件であれ、対象からそれが有していた価値を奪い去り、たんなる断片的な知識に整理してしまう。本来、これは獲得された知識が第三者とも共有できるものとなるための作業であり、いわば近代的学問の成果の原理とでも呼ぶべきものであった。しかし、その結果生み出されてきた知識は二重の意味で、近代の個人や文化に否定的な影響を与えてきた。第１に曖昧さを奪い去られるため、認識された対象はぼんやりとした覆いを失い、剝出しの姿を露にする。科学者の手に掛かれば、巨大ピラミッドの謎もバビロニアの空中庭園の伝説の真偽も簡単に説明されてしまう。その結果、陶酔は薄れ興醒めな気分が拡がることになる。認識者はもはや行為へと向かう力をなくしてしまうだろう。なぜなら「愛のなかでのみ、愛の幻想につつまれているときにのみ、人は創造的でありうる」(296)からだ。伝説や神話が ── ひとを恐れさすにせよ魅了するにせよ ── 何らかの動的に働きかける力を有していたのは、それがぼんやりとしたヴェールに覆われていたからである。個人の恋愛のレベルでも、探求への意欲が生まれるのは何らかの不可知な部分があるからだろう。『悲劇の誕生』７節では『ハムレット』の第２幕が引用され、「反省ばかりしていて、いわば可能性の過剰のために行動することの出来ない夢想家ハンス」(57)のエピソードが紹介されている。この「夢想家ハンス」の「安っぽい知恵」の喩は、近代の学問研究者を揶揄したものと考えることも出来るだろう。この両者に共通する性格は、直前の「認識は行動を殺すのだ」(57)という表現によって明確に規定されている。つまり科学的な認識者とは、自らの認識のために結果として何ら行為することのない存在なのである。さらに行為の欠如という上記の結論から、直ちに「科学的な態度によって認識された歴史的事実は現在における創造的営為を呼び起こさない」ということも明らかであろう。以上のことは、『歴史の利害』１節でテーゼとして次のようにまとめられている。

「歴史的現象は純粋かつ完全に認識され、認識現象に解体されてしまうならば、認識する者にとっては死んだものになってしまう。」(257)

ではこの価値の剝脱という科学の原理が、１９世紀後半のドイツで現実のものとなったように大規模に展開したならば、どのような事態が引き起こされるのだろうか[15]。

まず、それまで規範的な過去として高い位置を与えられてきた古代ギリシアも、中国やエジプトなど他の文明と変わらぬ古代として同じ位置にまで引き降ろされることになる。つまり無価値化の作用によって、いわばあらゆる対象が等しい価値を有するものとされるのである。すると今度は、数えきれぬ程に増大した「等しく研究の価値ある」過去の歴史的事象から膨大な量の事実が発掘され、それらがすべて個人の中に流れこんでくることになる。しかもこの場合、その圧倒的な量にもかかわらず個々の事実には何の陰影もアクセントもない。そのため歴史的学問の後発研究者は、毎日まるで無数の顔のないお化けに対面し、しかもそれらを正確に記憶しなければならないという、ある意味で最も神経をすり減らす経験にさらされることになるだろう。このような状況にあって、人間は自分を守るためになおいかなる手段を取ることが出来るだろうか。それは「押し寄せてくるものは何でも出来るだけ安易に受け入れ、つづけて急いで排除し吐き出すこと」(274)でしかない 。しかしその結果、「そこから現実的な事物をもはや深刻に受け取らないという習慣が生まれ、本当のもの、厳として存在するものから大した影響を受けない『弱い人格』が生まれてくる」(274)ことになる。さらに「空腹でもないのに過度に、それどころか欲求に反 して取り入れられた知識は、今や外部へと働きかけ造形し直す動機としては働かず、ある種の混沌とした内面世界に死蔵されたままとなる。」(272)

このように価値の剝脱によって行為へと向かう意欲を奪われた近代人は、顔を失った膨大な事実を前にさらに輪をかけて生への活力を失っていくのである。もちろんここで二つに分けて説明したような事態は、実際にはほとんど同時に生起するだろう。また、ニーチェ自身の記述もそれほど章立てに忠実に、論理的になされたものではないということも併せて確認しておきたい[16]。

最後の引用文中に登場した「弱い人格」と同じような近代の人間像についての描写は、『歴史の利害』の全編におびただしく見いだされる。例えば「他人の言葉や意見の道化」(253)とか、自分のものは何一つ持っておらず、ただ他の時代や風俗、芸術、哲学、宗教等々で自分を満たすだけの「歩く百科事典」(274)などといった調子である。ここまで考えてきたように、これらの現象の直接の原因は、歴史的学問への実証科学の適用のうちに見出すことができた。ではそこから生まれてきた近代人のあり方の特徴は何であろうか。それは「地平の不完全さ」であり、そこから由来する「形式と内容の不一致」である。実証科学の登場により生活空間に大量に流れこんでくることになった知識は、生活者と何ら親密な関係を持たない、ドイツ語で言う„fremd"（見知らぬ、疎遠な）な存在であった。仮に実証科学以前の社会を考えてみるならば、そこでは個々の知識は日常生活や祭儀、あるいは敵対勢力に関わるものなど、何にしても具体的な相貌をもって把握されるものであったに違いない。つまり人間の知識の空間は安定し、言葉の「地平」は保たれていたといえる。また近代以前の社会を想定せずとも、「女性や偉大な思想に対する激しい情熱にとりつかれ、翻弄される一人の男」の姿を思い浮べてみよう。その男にとって「世界はなんと一変」することだろう。「およそ知覚し得るものについて、いままで彼はこれほど身近

にまざまざと色づき、響きわたり、輝き、あたかも全ての感覚を通じて同時に知覚しているかのように把握したことはなかった」(253)だろう。つまりこの場合も、「地平は閉じ完全である」(251)。このような「地平」の閉じたあり方の最も極端な場合を、ニーチェは動物のうちに見いだす。

「動物は全く非歴史的に、ほとんど点のような地平のなかに住んでいる。しかしある種の幸福のうちに、少なくとも倦怠や偽装なしに生きているのだ。」(252)

人間には、動物ほどの安定した「地平」を期待することは出来ないだろう。しかしそれでもニーチェは、歴史的知識が形作る「地平の中」の存在であることに、生きることが過去とともに生きることを意味する人間にとっての健康を認めるのである。このことはニーチェの視点として記憶しておく必要がある。そしてその人間の「健康」が、動物の「少なくとも倦怠や偽装なしに生きている」「ある種の幸福」と似通ったものであることも看過できない点である。このようなものの見方は、後に彼が実証科学の克服を試みるときに到達すべき目標として意味を持ってくるだろう。

知識が生と関わり、具象的に把握されているということは、言い換えれば、知識と生の様々な表現との間に緊密な関係のあることを意味している。ところでここで関心を引くのは、ニーチェがこれを「形式」と「内容」の一致として捉えていることである。反対に言えば「地平」を失った近代人は、「形式」と「内容」が全く一致していないのである。先に引用した「知識の内面世界への死蔵」を指摘する文章に続けて、彼は次のように語っている。

「あの近代人は、この混沌とした内面世界のことを奇妙な誇りをもって、自分に特有の『内面性』と呼ぶのだ。それからこうも言うだろう、内容(Inhalt)はある、ないのは形式(Form)だけだと。しかし、あらゆる生物にとってこれは全くふさわしからぬ対立だ。われわれの近代的教養が何ら生命のないものであるのは、まさにそれがこの対立なしには理解することのできないものであるからだ。つまり近代的教養とは、決して本当の教養ではない。それはただの教養をめぐる一種の知識にすぎない。」(272−73)

ニーチェに言わせれば、ドイツ人が「内面性（哲学）の民族」などと自称するのは茶番である。「近代的教養」などは「野蛮」(163)であり、「何ら生命のないもの」に過ぎない 。その根拠は「形式」と「内容」の分裂にある。だがいくらか極論との感も否めない。確かに生あるものの健康は、「地平の完全さ」や「形式と内容の一致」と不可分であろう。しかし、それなりの成果を収めてきた近代を「野蛮」の一言で片付けてしまうならば、ニーチェ自身の文化理解のあり方が再度問われねばならない。これに対して彼は、反時代的考察第１編の１節で次のように答えている。

「文化とは何よりもまず、一民族のあらゆる生の表現における芸術的な様式の統一である。(Kultur ist vor allem Einheit des künstlerischen Stiles in allen Lebensäusserungen eines Volkes.）多くを知り習得するなどということは、文化の必要欠くべからざる手段でも文化の兆候でもない。場合によっては、それはこの上もなく文化の正反対である野蛮と一致する。つまり様式のなさ、あるいはありとあらゆる様式の混沌とした錯綜である。」(163)

「様式の統一」とは、集められた知識（内容）が集めた人間の中で有機的に関連しあっている（形式との一致）ことを意味する。もちろんそのためには、「多くを知り習得」していることは何ら必要用件でないばかりか、その洪水のような量のためにマイナスの要因としてさえ働く。ゆえに知識の増大によって特徴づけられる近代は、それだけでは文化の名を要求することは出来ない。しかし問題は、それが「芸術的」であらねばならないということである。なぜ近代の教養は「芸術的」とはいえないのだろうか。なぜ「形式と内容の一致」は「芸術的」といえるのか。その結果「芸術的」ということは、何を意味するのだろうか。

３．科学的芸術作品の構造

ニーチェという思想家の特徴として、身体や生理的なものへの関心を指摘することが出来るだろう。それはヨーロッパ的理性に対する彼の批判に由来している。しかし、たんに理性の対してそれとは異質な身体を立てるというのであれば、それは両者の不毛な分裂をさらに深めるだけのことにすぎない。そうではなく、ニーチェの功績は理性をも身体の視点から考察したところにあった。その意味で、ニーチェを動物性への回帰を説いた扇動者のように解した過去の一部の解釈は誤りであったといわざるをえない。確かに精神と身体は別物である。しかし病や健康の構造において、両者には通じるものがあるのではないだろうか。ニーチェは後年、キリスト教に対して仏教を相対的に評価した。そのとき彼の評価の基準となったのは、仏教は「衛生学」であるということだった[17]。対してキリスト教はルサンチマンの宗教とされる。キリスト教の神とは、地上では決して打ち勝つことの出来ない強者たちを、せめて同じ高さまで引きずりおろそうとする心理的奴隷階級の怨念が生み出したものだというのだ。そこには身を焼くような不健康な憎しみがある。では仏教の「衛生学」とは何であろうか。それは身体を配慮するのと同じように、精神を配慮するということである。このようなものの見方は、すでに初期ニーチェにも見いだされる。本論のテーマである『歴史の利害』では、最終節（第１０節）で歴史病に対する「治療法」(331)が語られる際に、「科学のすぐ側に生の衛生学がたっているのだ」(331)と述べられている。また注意すれば「歴史病」について語るとき、ニーチェの表現には生理的な言い回しが多いこともわかる。たとえば「空腹(Hunger)でもないのに過度に、それどころか欲求(Bedürfniss)に反して取り入れられた知識」とか、「それ（押し寄せてきた知識）を大急ぎで排除し、吐き出す(ausstossen)」といった調子である。もちろんこの場合、知的能力の「内臓」は調子を崩したものとして描かれている。

ではどのように調子を崩しているのだろうか。それは「形式と内容の不一致」と診断し

てよいだろう。生きているものは何らかの形を持つ。その表れ方が「形式」である。そして「形式」の素材となるのは、身体にとっては食物であり、知性にとっては知識である。「内容」とは、これら素材としての食物や知識のことに他ならない。ところで健康な有機体の内部では、「異化作用」と呼ばれる消化吸収が行なわれている。自然界では、シマウマを食べたライオンがシマウマになってしまうということはありえない。それはライオンの消化器官によって、シマウマの肉の蛋白質がいったんアミノ酸にまで分解され、それが再びライオンの体を構成するのに必要な蛋白質へと合成されるからである。これが「異化作用」である。ここにおいてシマウマという全くの異物であった「内容」は、ライオンという統一ある「形式」を得ることになる。もしもこのときライオンの消化作用が失敗し、後足の一部に蹄が出来たり体に黒いタテジマがついたりすれば、それは「内容と形式の不一致」か、あるいは「様式の不統一」といわねばならない。また、いったん喰い千切ったシマウマの肉にも部分的に消化しきれないところがあるかもしれない。これはどうするか。当然便として排出される。もしもこのとき、未消化のものが排出されぬまま体内で腐敗していったとしたらどうなるのだろう。おそらく何らかの有機体にとって危険な状態を惹起することは間違いない。

ところがライオンの後足に蹄が生えたり、未消化物がそのまま体内で腐敗していくといった性質のことが、人間の知性においては日常的に起きているのである。たとえば認識者が吸収した知識を時間をかけて消化し自分の血肉とすることなく、かえってそれに支配され、「他人の言葉や意見の道化」になってしまうことはめずらしいことではない。また、「歩く百科事典」とニーチェが揶揄したように、自分の「形式」を得るために不必要となった「内容(知識)」も捨て去られることなく、「内面世界に死蔵」されたままであることも近代人にとっては通例である。このような状態は「様式のなさ」という点で文化の名に値しないだけではなく、知性にとって不健康な状態であり、前節で見たように時代や民族の創造的な力を衰退させていく原因ともなるのである。

また、知性的な営みにおいて「内容」が十分な「形式」を与えられない場合には、人間は「偽装」する不誠実な存在であらねばならない。「形式」が「内容」を十分に表現していないとは、言い換えればいかなる表現（言葉や行為）も心底からの吐露とはなりえず、悪意はなくともなにか腹に一物を残すことにならざるをえないからである。つまり「偽装」とは、「形式と内容の不一致」という病の症状のひとつといえよう。しかし、ここでも子供や動物は対照的なあり方を示している。「否認すべき過去などひとつもない子供」や、「動物は偽装する術を知らず、何ものをも隠さず、あらゆる瞬間に全くありのままの姿であり正直でしかありえない」(249)からである。この「あらゆる瞬間に全くありのまま の姿」ということが、「形式と内容が一致」した健康な姿である。

もちろん全ての時代の人間が病的な状態にあったのではない。近代以前には人間の中で「生と歴史」の間のバランスは保たれていたのだ。言い換えれば、流入してくる知識に対

してこれを「造形」し、あるいは「排出」する力が対処し得ていたのだといえよう。この両者の限界を超える状況は、近代の「歴史は科学であらねばならないという要求」(271)によって初めて生まれてきた。しかしいかなる時代の人間であれ、人間が歴史的な存在であるかぎり、子供や動物のように内と外が完全に一致しているということはありえなかったであろう。近代人ならずとも、程度の差こそあれ多少の不一致は生じざるをえないはずである。つまり、何とか両者が一致するように無意識のうちに不断の努力が払われていたはずなのだ。ではその努力とは、ニーチェの言葉でいえば生の「造形」的な作用とは、一体どのような働きなのだろうか。意識が歴史という他者を完全に「異化」してしまうには、どのような働きが必要なのだろうか。それは、外界から自分をいったん遮断する「非歴史的」な働きの力を借りて、何らかの価値や関心を軸に、内面に蓄積された知識の集積に過不足なく表現を与えるということである。これを「芸術的な」表現のあり方と名付けることができるだろう。芸術に特徴的なあり方によってのみ、「内容」は「形式」へと余りなく転化されるからである。そもそも、ニーチェの「形式と内容の（不）一致」という表現は論理的ではない。なぜならこの二つの概念は、本来互いに異なるものであるからだ。そうすると、この表現の意味するところは字義通りの両者の一致ではなく、「内容」が「形式」へと転化されるその度合いを問うものと考えられるだろう。そして芸術は優れたものであるほど、この転化の度合いが１００パーセントに近いものになる。このことは一面では、芸術作品がたとえ過去の時代に属するものになったとしても、決して古びることがないということを意味している。なぜなら、「形式」と「内容」の間に一回性の対応があるということは、一回きりの生が一回きりの表現のうちに結晶しているということになるからである。これがあらゆる命あるものの自然なあり方である。反対に芸術以外の形式、例えば近代のほとんどの学術論文や新聞記事においては、同じひとつの「内容」を別の「形式」、たとえば違った構成や言葉づかいによっても言い表わせるのであり、ここには両者の間に一回性の対応があるとはいえない。さてニーチェによれば、文化といえるのは「あらゆる生の表現における芸術的な様式の統一」であった。以上の考察によれば、「様式が統一」されているならば、それはつねに「芸術的」である。そして「生の表現の芸術的な様式の統一」が実現するためには、人間の生にとって本来的なものである歴史は、芸術へと止揚されなければならない。そのとき初めて、一段高い意味で人間も動物たちと同じように「偽装」することなく、「あらゆる瞬間にありのままの姿」を生きることが出来るようになるだろう。そしてそのことによってのみ、科学による生の衰退を克服することができるのだとニーチェは考えたのであった。

では以上の条件を満たすような歴史認識とは、具体的にどのようなものであろうか。それを明らかにするために、歴史が芸術へと止揚されていく様子をもう少し詳しく考えてみよう。ニーチェは『歴史の利害』６節で、歴史家の内面で起こる出来事を描写したシラーの次の言葉を引用している。

「現象はつぎつぎに盲目的な偶然や無法則の自由から脱却して、調和するひとつの全体――これはもちろん歴史家の観念のうちにしか存在しないが――に適切な一分枝として参加し始める」(291)

個々の事実（現象）それ自体は、いかなる法則によっても拘束されてはいない。事実と事実の間の関係は、歴史家によって初めて与えられていくということが、ここでは暗示されている。もしもその通りならば、流入する事実に溺れないようにするためには、人間がそれらに積極的に意味を与えていかなければならない。それは彼自身の言葉でいうならば、「生起したことから再び歴史を作り出す(aus dem Geschehenen wieder Geschichte zu machen)」(253)ということである。人間は歴史を追認するのではなく、歴史を創造していかなければならない、これが彼のテーゼといえよう。しかしこのような歴史認識のあり方は、いわゆる歴史研究者の仕事というよりも歴史を素材とした芸術家のあり方に近いのではないだろうか。事実、ニーチェは彼が求める歴史認識が成立する瞬間を「吹きつのる風景や稲妻や雷鳴のもとで、あるいは荒れ狂う海の上で、画家が自分の内的な像を凝視している、あの美的な現象」(290)と表現しているのである。

「あの瞬間こそ、芸術家の内面における最も力強く、最も自己発動的な生産的瞬間であり、最高の種類の構成的瞬間であって、その結果生まれる絵画像はおそらく芸術としては真実であるが、歴史としては真実ではないだろう。」(290)

ここで述べられている内容は、もはや単純な科学的認識とはいえない。しかし、それは芸術と動機を同じくする、それゆえに創造的な歴史認識のあり方といえるだろう。ここで再び本論の出発点に帰れば、「歴史は芸術作品に作りかえられることに、つまり純粋な芸術形態をとることに耐えられた場合のみ、もしかしたら本能を維持し、その上目覚ませることさえ出来るかもしれない」のであった。ここに至ってようやく「科学的芸術作品」の姿が明らかになったのである。

註

引用の後に数字のみ記したものは Nietzsche Werke(Bd.1)、Bは Briefe、FはFragment (Bd.7)（断片の通し番号を記した）の略である。使用したTextについては参考文献の欄を参照のこと。

1)ニーチェによれば、ソクラテスこそが「美しくあるためには全ては理知的であらねばならない」(85)という美学上の根本法則のもとにエウリピデスを導き、ギリシア悲劇を破滅へと追いやった張本人であった。また、Harry Neumann, Scripps College(S.71—73)は、ニーチェにとって歴史の克服とはソクラテスの克服を意味していたと指摘している。

2)Burckhardt, S.158(An Arnord von Salis)

3)『歴史の利害』は１８７３年末のわずか２、３ヵ月のうちに書き上げられている。しかも、その間ニーチェはバーゼル大学付属ギムナジウムでの語学教師としての仕事などのため、執筆に十分な時間を持つができないでいた。さらに彼の生涯に付きまとった頭痛など、身体も芳しくない兆候を示し始めていた。Jörg Salaquarda, S.5—7

4)ニーチェが求めていたのは実証科学を克服した個々の作品ではなく、それらを通じて科学的な傾向を帯びた一時代全体が刷新されることであった。そのため彼の視線はおのずと（ディオニュソス的諸力による）青年教育へと向かうことになる。だが無意識の底から湧出する青年のディオニュソス的な力を計画的に導くことは困難である。ここに彼の言葉が肝心なところで沈黙せざるをえない構造があった。この問題については「科学的芸術作品」の実際を追求する今回の論文(正続)では明らかにする余裕はない。筆者のニーチェに関する第３論文に期待していただきたい。

5)「（忘却することの大切さを説くニーチェに対して）ブルクハルトにとっては、過去に存在したものを獲得することの利益は揺るぎようがなかった。」「生に対する歴史の利益を確信しているブルクハルトは、ニーチェの考察の結論の一文のなかに歴史の『連続性』を守ることへのいらだちを見て取らずにはいられなかった。」Karl Löwith, S.19

6)「十八世紀後半に作られた『陶冶』(Bildung)という語は読書人の伝統の唯一最重要の教義を含んでいた。・・・要は、新人文主義者が古典的原典に接する態度にある。新人文主義者は単に原典に触れてそれを知るに至るだけではない。むしろ原典に含まれた道徳的、美的範例から深遠かつ総体的な影響を受ける。全人格は認識行為に没入する。もし学習の素材が正しく選ばれるならば、素材の熟考によって叡知と徳の域に達することが可能となる。素材は学ぶものをひきつけ、高め、変えることができる。新人文主義者はこのようにして陶冶（教養）という名のぬぐうことのできない資質を獲得することになり、それが貴族の資質に対する潜在的対抗要素となるのである。」リンガー、５５ページ

7)西尾幹二、第１部２３１ページ

8)ここで述べた文献学の科学化は、そもそも文献学に内在していた要素の一方が重きをしめるようになった結果にすぎないとする指摘もある。Hartmut Schräter (S.21,24)によれば、「古代を研究する際の教育的要求と歴史的学問としての文献学の本質の間には矛盾」があるという。

「文献学の本来の意図、つまり古代を証左するものの精神を客観的に解明し現在化しよ

うとすることは、典拠批判による破壊や現象に対する歴史的発生的推論のためにほとんど排除されてしまった。これらの作業は広く一般には、作品自体の注釈として知られている。確かに注釈と並んで、古代の完成美についての伝統的な観念は世間では教養財でありつづけている。しかしこの観念は、もはや専門化の一途を進み『リアリズム』の方向へと位置付けられている研究を支え満たすことは出来ないのである。」

「文献学の古来からの領域は、何よりも記述された伝承の、とりわけ古代文学の歴史的批判的な保存と解釈である。文献学の内的矛盾は、それが『同時に歴史と自然科学と美学に』なってしまったことに由来している。作品の直接的な享受を求める文献学の芸術的関心は、歴史的な観察のあり方のために緊張におちいるのである。」（最後の引用文中の『』内はニーチェのテキストからの引用）

このように文献学が本来、科学と芸術のふたつの要素をあわせ持つものであるのなら、本論がテーマとする両者を融合させようとするニーチェの試みは、真の文献学の成立を目指すものであったと考えることも出来るだろう。

9)エリーザベト・ニーチェ（ニーチェの生涯・上）８６ページ

10)西尾幹二、第１部１６２ページ

11)西尾幹二、第２部１６３ページ

12)西尾幹二、第２部１４－１５ページ

13)「一八七〇年から一九一四年の間に、ドイツは高度の工業国家に移行した。景気の上昇はすでに一八七〇年以前に始まっており、ドイツ帝国の統一がそれに拍車をかけた。その後経済成長率はいよいよ急速に高まり、一八九〇年から一九一五年の間に頂点に達した。この発展全体はスピードといい徹底ぶりといい未曽有のものであった。二、三〇年のうちにドイツは比較的遅れた農業中心の国家から世界最大の工業国に変身した。」リンガー、２８ページ

14)ニーチェが自ら反社会学的立場を鮮明にしている次の一文を引用しておく。

「それ以外の意味では大衆など悪魔と統計にさらわれてしまえ。何だと、統計が歴史には法則があることを証明しているだと。そうだ、統計はいかに大衆が卑しく吐き気がするほど画一的であるのかを証明しているのだ。」(320)

15)「外面上、大学はかつてない繁栄を謳歌していた。ゼミナールと研究所はしだいに増えてゆき、ドイツの科学者、文献学者、歴史学者の綿密な研究は国際的に名声を得た。しかしこうした業績にほんとうに満足したものはほとんどいなかった。」（第５章「文化危機の起源一八九〇年――一九二〇年」より）リンガー、１７２ページ

16)ニーチェ自身、この論文の内容や構成には満足できないでいた。それに輪をかけて、２人の知己から送られてきた批判的な内容を含む手紙は、彼の著述家としての自信を喪失させるのに十分なものであった。一読後、コジマ・ヴァーグナーとエルヴィン・ローデはニーチェに宛てて次のように書き送っている。

「この本はあまりに一般的に書かれていて、たいていの人には理解されないでしょう。・・・また叙述と文体の形式には欠点がないとはいえないし、２、３の言葉の無頓着さは叱責に値します。」(S.10)

「君は演繹することがあまりになさ過ぎる。そしてそれを公正な程度を超えて読者に任せてしまっているのだ。君の思想と文章のあいだに架かる橋を見付けることが必要だと思う。・・・ときおり僕は個々の部分はまずそれ自体で書き上げられたものであり、君は金属をひとつに溶け合わせることを省いて、それらを全体に接ぎ合せてしまっているかのような印象を受けるんだよ。」(S.12) Jörg Salaquarda,S.9—13

17)「仏教はキリスト教よりも百倍も現実的である。・・・仏教はもはや罪との戦いとは言わずに、現実を尊重して苦悩との戦いというのだ。・・・・仏教は私の言葉で言えば善悪の彼岸にある。」「あまりにも長いこと概念や煩瑣な論理的な手続きに没頭していた生活・・・（のために起こった）抑鬱に対して仏陀は衛生学的に対処する。それに対して彼が適用するのは、野の生活、放浪の生活、食事の制限と選択である。」(Bd.6,186)（いずれも『アンチクリスト』第２０番）

参考文献

Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe. Bd.1,6,7. Hrsg. v. G Colli u. M Montinari. Dtv/de Gruyter, Berlin/New York 1988.

:Nietzsche Briefwechsel. Kritische Gesamtausgabe. 1.Ab. 2.Bd. Hrsg. v. G Colli u. M Montinari. Walter de Gruyter, Berlin/New York 1975.

Jacob Burckhardt: Briefe. 5.Bd. Schwabe & Co Verlag, Basel/Stuttgart 1963.

Hartmut Schräter: Historische Theorie und Geschichtliches Handeln zur Wissenschaftskritik Nietzsches. Mäander Kunstverlag, Mittenwald 1982.

Harry Neumann,Scripps College: Socrates and History. In: Nietzsche Studien. Bd.6. Walter de Gruyter, Berlin/New York 1977.

Jörg Salaquarda: Studien zur Zweiten Unzeitgemässen Betrachtung. In: Nietzsche Studien. Bd.13. Walter de Gruyter, Berlin/New York 1984.

Karl Löwith: Jacob Burckhardt, Der Mensch inmitten der Geschichte. Kohlhammer 1966.

エリザベート・ニーチェ：『若きニーチェ』（ニーチェの生涯・上）　浅井真男訳　河出書房新社　１９８３年

フリッツ・リンガー：『読書人の没落』西村訳　名古屋大学出版会　１９９１年

西尾幹二：『ニーチェ』第一部、第二部　中央公論社　昭和５２年

Wissenschaftskritik bei dem frühen Nietzsche
—von einem Begriff„wissenschaftlicher Kunstwerke"—

Shin KIMOTO

Nietzsche hat in seiner Basler Zeit die zweite „Unzeitgemäße Betrachtung" mit dem Titel „Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben" veröffentlicht. In dieser polemischen Schrift hat er Kritik am sogenannten Historismus geübt, aber man kann dort trotz dem Titel fast nichts „vom Nutzen der Historie" finden. Der Grund dafür ist in dem Motiv zu sehen, das Nietzsche zum Schreiben der oben genannten Arbeit geführt hat. Er hat durchs Schreiben an dem, was ihn in der Jugendzeit gequält hat, d.h. am Historismus(Positivismus), „Rache" genommen, wie er selbst im Vorwort der Schrift erwähnt. Trotz der Umstände der Entstehung ist es aber möglich, in der zweiten „Unzeitgemäßen Betrachtung" einen konstruktiven Vorschlag zur Erneuerung des Positivismus zu erkennen. Im 7. Abschnitt äußert er folgendes: „nur wenn die Historie es erträgt, zum Kunstwerk umgebildet, also reines Kunstgebilde zu werden, kann sie vielleicht Instincte erhalten oder sogar wecken." Mann kann den Inhalt des Vorschlages, der hier gemacht wird, mit einem Wort, mit „wissenschaftlichem Kunstwerk", fassen, das in einem Fragment derselben Zeit vorkommt. In diesem Aufsatz betrachte ich die konkrete Gestalt des Begriffes und dessen historischen Hintergrund. Der Positivismus hat sich in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts weiterentwickelt, was dazu geführt hat, daß eine große Menge Kenntnisse, die keinen eigenen Wert und deshalb keine Beziehung mit dem Leben haben, in den Lebensraum eingeflossen sind. Angesichts der Überfülle von belanglosen Kenntnissen muß man sich wie in einem Meer verlieren, oder„ zu wandelnden Encyclopädien" werden. Nietzsche hat dagegen die Überlegenheit der künstlerischen Art des Erkennens behauptet, mit der man einen Wert haltend schöpferisch „aus dem Geschehen wieder Geschichte macht." Sie hat den Vorteil, daß man organisch Kenntnisse(Geschehen) erfassen kann, ohne dadurch im Meer der Kenntnissen zu ertrinken. Nach dem Ausdruck Nietzsches kann man das historische Erkennen als „ein künstlerisch wahres, nicht ein historisch wahres Gemälde" bezeichnen.